

梅毒病院の医師として、主として遊女の梅毒の予防や治療という形でわが国の医療に関与した。この院長職に対して日本側から俸給を支払うことなく、イギリス海軍軍医としての立場を堅持して出向という形をとっていた。このような立場を考えると、ニュートンの死にさいして明治政府の対応は、はなはだ手厚いものであったといつてよいであろう。さきに述べた長崎での中傷や誹謗に対する陳謝の意味も含まれているといえよう。

(東京慈恵会医科大学・順天堂大学医学部)

## ブライト氏病の日本への最初の紹介 について

会 田 恵

英国のガイ病院 R・ブライト医師(一七八九—一八五八)が有名な *Reports of Medical Cases* をロンドンで出版したのは一八二七年で、この中で指摘された尿蛋白と浮腫を伴う腎臓疾患が、その後、とくに独、仏で長くブライト氏病と称されていた事は、一九世紀前半の臨床医学における不滅の功績としてよく知られている所である。

演者は、まずこのブライト氏病の紹介が、いつ頃に始まったかについてのみ述べ、本症(以下ブライト氏病を「本症」とする)の受容については、尿蛋白の検査実施についての調査を要するので、今回は一、二の例についてのみ述べる。

もっとも早い紹介は、やはり蘭医による講義にみられるのであって、安政四年(一八五七)十一月に開校された長

崎でのポンペの医学講義「朋氏内科論」にわずかにみられる。モルビュス プレチーとして出ており「分泌異常ヲ違フ者」として蛋白尿に少々ふれてある。

長崎では、ボードインが文久二年（一八六二）から三年あまり講義を行って病院での指導を行い、石田氏が発見された尿糖の検査が当時の診療録に行われていたが、石田氏の御教示によると尿蛋白の検査はみられないとの事である。

明治二年（一八六九）にはボードインが大阪医学校で講義を行っているが、同二年の「日講記聞」には「男子泌尿器」の「腎藏病」の項に「貌麗都腎病」として急性と慢性に分けてそれぞれ四頁、六頁に説明がみられる。

その後は、明治九年（一八七六）になると寺畑氏が指摘されたように、慢性腎臓炎についての記載がみられ（『医院雑誌』）、これには「尿蛋白ヲ含ム」とあり、また明治九年八月より一年間の疾病統計を岩手県公立盛岡病院で出しているが、（『医院雑誌』明治十一年）この中に「武雷篤」の病名分類が区別されているので、おそらく尿蛋白は検査した結果の診断と推定される。

以上のような初期の紹介は、本症の臨床診断についての説明の域を出るものではない印象をもっているが、R・ブライトの原著にみられる本症の病理解剖所見まで含めた腎臓炎の紹介は明治期は勿論、大正期でもみられなかった。この辺の経緯について、わが国のヨーロッパ医学の受容、その他の要因からも考察を試みる。

（新潟県柏崎市）